

【全体概要】

西尾市の大豆栽培は愛知県平均を上回る収量をあげているが、天候の影響も大きいいため収量の年次変動が大きい。大豆の安定多収栽培のためには、開花期までの適度な生育量の確保、生育中期における着莢数の確保、生育後半の窒素栄養の確保が必要である。そのため、全量基肥施肥における肥効調節型肥料の効果を実証し、収量の増加、大粒率向上など品質向上を目指す。

新品種・新技術等の概要

【大豆肥効調節型肥料の実証】

全量基肥施肥における肥効調節型肥料により、大豆の収量向上と大粒比率など品質の向上を図る。開花期以降に肥効が現れることで、生育後半の窒素栄養確保が期待できる。肥効調節型肥料2銘柄を実証試験する。



主な取組内容

【生育調査及び収量調査】

- 実証ほ場の設置(7月)
- 生育調査＜開花期、子実肥大期、成熟期＞(7月～12月)
- 収量・品質調査(12月)
- 情報交換会(9月～2月)

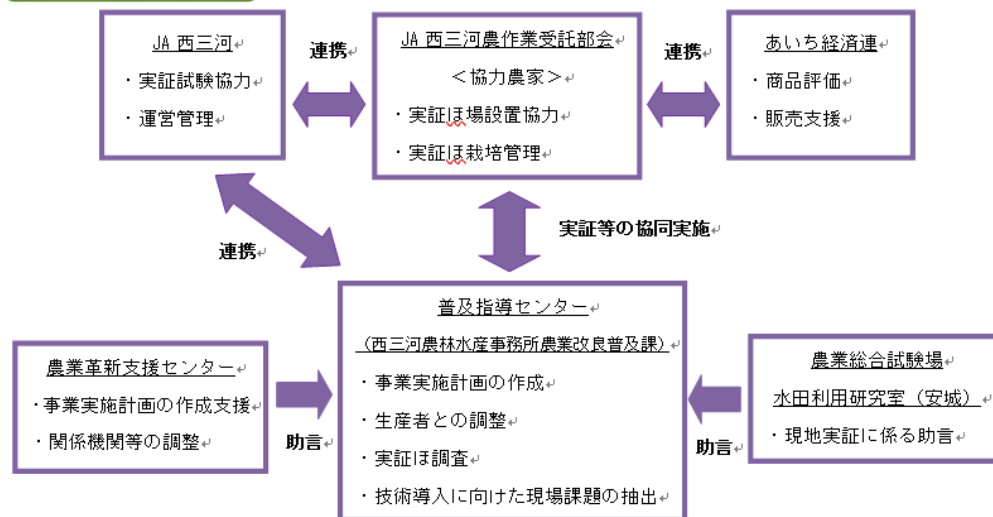
【品質評価】

- 成分分析及び豆腐加工適性試験(2月)
- 豆腐加工試験(2月)

【手引きの作成】

- 肥効調節型肥料の効果等まとめた生産技術に関する手引きの作成(3月)

実施体制図



課題と今後の対応

【課題】

実証試験では、慣行区（無施肥）と比較すると、生育（茎長、葉色）は、全量基肥肥料を用いた試験区若干上回った。また、坪刈収量調査でも、試験区の方が精子実重で24kg/10a、大粒率で3.5%、百粒重で0.5g上回る結果となった。

但し、2か年の結果から、沿岸部の土質で平均単収の低い傾向にある地区で、全量基肥肥料による増収効果が確認できたが、平均単収が高い傾向にある地域では、大きな効果は得ることができなかった。

【今後の対応】

令和4年産大豆栽培において、平均単収が低い地域では、栽培こよみに施肥技術を導入し、引き続き、産地で大豆増収技術に取り組む。